

HEART PIECE

DOFO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人は何をもって人と呼ばれるだろう。頭、手、足、体、これがある人と呼ばれるのだろうか。これがあっても化け物と呼ばれることもある。人扱いされないこともある。人であっても人と認識されない。人の家族は人の親と子、あるいは兄弟が揃って家族と呼ばれる。ならばロボットはどうだろう。人型のロボットが人の代わりになって家族になれるだろうか。犬や猫もペットとして家族になることができる。ではロボットは？なんと呼ばれる？

目次

第一話「家族をください」	1
第二話「世間」	9
第三話「来店者」	13

第一話「家族をください」

ある街に雨が降った。雨と言っても小雨だ。傘を差す人もいれば、小雨だからと気にせず傘を差さない人もいる。あるいは建物の中に身を潜める人も。ある婦人は洗濯物を片付け、小さな水溜りには子供が足踏みをしてはしゃいでいる。

やがて雨が止み、昼だろうか夜だろうか、少しわかりづらい逢魔時。空には薄く星が煌めき、店の光と街灯が街を照らす。店は雑貨店、飲食店、パン屋などが並んでいる。その中で一際変わっているのが「ハートショップ」という店だ。その変わった店に小さな客人が入る。「いらっしやい」

イカつい男が挨拶をしてきた。中は悪そうな顔をした人から一般的な人まで沢山の人がいた。居酒屋の様な雰囲気ではあるが一つ違うことは、全ての人が『人形』や『ロボット』を連れていることだ。

客人はカウンターへと詰め寄り、イカつい男の前に立った。少しオロオロしながらもイカつい男に尋ねた。

「…あ…あのっ…かっ…家族をください…」

客人が放った言葉に店内は静寂した。その後数秒たって店内にいたほとんどの者が笑った。

「えっ…えっと…お金ならあります！」

「だーっはっはっは！嬢ちゃん、その歳で小遣い貯めて来たのか」

そんな笑い声が響く店内にまた一人来客者が入ってきた。

「おっ、ネモ。聞いてくれよ、この嬢ちゃん、この歳で『フリド』を作りに来たんだぜ！」

「店長、いいんじゃないんでしょうか。子供だって自分で手に入れたくなるものですよ」

来客者の名はネモ。黒髪で身長は178cmほどで中性的な顔である。

「よーし、なら嬢ちゃんにはおすすめの『ハート』を出してやろうー！」

そう言つて店長は後ろの棚から沢山のハート型の物をだした。

「まずはこれ！こいつはガラスのハート。繊細な心を持たせたい人に

おすすめだ。見た目も綺麗だから女性には人気だぜ」

店長が出した物はガラスで出来たハート。店内の光に照らされて煌めいている。

「次にこいつだ！アイアンハート、強靱な心をもっていて、ちよつとやそつとじゃ落ち込まないぞ」

次に出したハートは名前通り、鉄で出来たハート。見た目からも硬そうだ。

「ちよつと変わってるが次はこいつだ！クロツチハート、貧相な性格でケチなところがある。価格も安いし嬢ちゃんでも買えるだろうよ」
沢山の布が縫い合わされたハート。ボロボロの様な見た目をして
いる。

「えつと…」

「他にもだな…」

「店長、人形にあった心を付けるのはどうでしょうか」

店長の話しが長くなりそうと察したのかネモが話しを止めるように口を出した。

「そうだな。嬢ちゃん、今日は人形かなんか持ってきてるか？」

「人形…ですか？人形が必要なんですか？」

少女は不思議そうに答えた。

「嬢ちゃん、まさかかと思うんだが『フリド』の仕組みとか知らないのか？」

「…こゝ、こゝこに行けばずっと一緒に居てくれる家族があるって書いてあつて！」

小さな客人はチラシを見せた。そこには可愛らしいイラストと一緒に『新しい家族を作りませんか？』と書かれていた。

「…店長、ちゃんと『人形』は用意しないとダメと書かないといけませんよ」

「いやー、うっかりしてたよ。まさか『フリド』を知らねえ奴が来るとは思わなかったし。それにお前の店、隣だろ？人形やロボットになんかあつたらお前に聞けばいいしよ」

オイオイ、チャントシゴトシロヨテンチョウサンヨ！ギャハハ！

「うるせえ！外野は黙ってる！」

ネモは店長の胸ポケットに入っているペンを取り、チラシの裏に絵を描き始めた。

「キミ、名前は？」

「…アリエラです」

「ではアリエラ、『フリド』というのは人形やロボットと、この『ハート』というのを使って作るんだ」

ネモはチラシの裏に描いた絵を見せながら説明をした。

「このハートを人形やロボットに入れると不思議と動き出すんだ。ハートの種類によって性格などが変わってくる、これが完成することでフリドと呼ばれるんだ」

「へえー」

「昔はハートを作るのに労力がとても必要で1年に1、2個しか作れなかったんだけど技術の進歩にやって量産出来るようになったんだ」

ネモは次々と絵を書いていく。

「伝説によればある魔女が寂しさを紛らわすために作ったと言われているんだ」

「寂しさ…ですか」

「アリエラ、君はなんでフリドが欲しいのかな？」

「…私は……」

アリエラは話したくなさそうな素振りをしている。

「いや、無理に話さなくてもいいんだ。聞いてすまない」

「…いえ！そうですよ、理由がないとおかしいですよ」

アリエラは少し合間を置いて重い口を動かした。

「…私…先週、事故で親を無くして…親戚とかが来て…財産の分配とかよくわからなくて…誰も助けてくれる人がいなくて…寂しくて…うつ…みんなは家族がいるのに…なんで私だけいないのかって思っ…うつ…」

「おいおいっ、嬢ちゃん！もう話さなくていいから！おいネモ、泣いちまったじゃねえかよ」

「すみません、私の配慮がありませんでした」

オイアノジヨウチャンツテ、クライストノカケイノモノジヤナイノ
カ!?

「?…クライスト家ってあの貴族のか?」

他の客の話しによると、アニエラはこの辺りでは有名な貴族で財閥
にも名を轟かせていると言う。夫妻と娘、アニエラの三人家族で幸せ
に暮らしていた。

しかし、先日にも車の故障により夫妻は事故死。幸いにも娘のアニエ
ラは家で遊んでいて、事故には遭わなかったという。世間ではこれが
騒がれ、新聞には『若い娘を残して死歿、クライスト家没落の危機?』
と書かれた。クライスト家には親戚やクライスト家の会社の重役人、
傘下などが押し寄せたと言う。クライスト家の執事兼秘書がこの場
を収めたが事態はあまり宜しくないと言うことだ。

「それで家族が欲しくて店に来たのか」

「ぐすつ…はい…」

「ほれ、嬢ちゃん。この飴でも食べて落ち着きな」

「…すみません」

しばらくしてアニエラは落ち着いてきたのか泣きやんできた

「そうだ!ならネモの店で好きな人形でも選んでくるってのはどうだ
?」

「え?」

「私の店ですか?」

店長はネモの耳に小声で話した。

「この嬢ちゃん、貴族の家系だから金を持つてるし、儲けのチャンスだ
ぜ?」

「いいんですか、こんな時に」

「まあまあ、こんな時だからこそ嬢ちゃんには元気になってほしいか
らフリードを作るんじゃないか」

「よし、決まりだ!嬢ちゃん、もう遅いしすぐこいつの家で人形を選ん
でいこー!」

.....

「うわー、すごい！人形が沢山！」

ネモとアリエラの二人はネモの店に行き、アリエラの人形を選ぶことにした。

「気になった物があつたら声をかけてくれ」

ネモは店長から受け取った荷物を店の奥に置きに行つた。

「あの、これはなんですか？」

アリエラが指を指したのは人形の身体に沢山の糸が張り巡らされている人形だ。ネモはお盆に乗せたお菓子と一緒に戻つて来た。

「それは操り人形、マリオネットだね。あつ、お菓子でも食べて寛いでいってくれ」

「わあ！ありがとうございます！」

お盆に乗せたお菓子を一つ手に取り食べた。

「人形に糸が付いてるだろ？その先にはスティックつて言う木の棒が付いてるんだ。これを動かすと……」

「！……生きたように動いてる！」

「これで芝居などをするんだ」

「じゃあ、これはなんですか？」

次に指したのは卵が少し歪んだ形の人形だ。ネモはそれをカウンターに置いた。

「これはマトリョーシカ人形といって、上半身を持つと……」

「あつ！人形が出てきました！」

「そう、そしてまた人形を持つと……」

「また人形が出てきました！面白いです！」

アリエラはキラキラした目で見つめていた。

「じゃあ！じゃあ！これはなんですか？」

上に釣り下がった人形を指しながら後ろに下がった。その時、後ろを見ていなかったアリエラの背中に何か当たった。

「！……危ない！」

ちょうどアリエラの後ろには甲冑があり、それに身体が当たり、崩れ落ちてきた。ネモはすぐに気づき、アリエラを抱きしめ、落ちてく

る甲冑から身を守った。アリエラは暫く何が起きたのか分からず、放心していた。

「ご、ごめんなさい！私が周りを見ていなくて！本当にすいま…え？」
アリエラはすぐに離れて、謝ろうとしたがある違和感に気付いた。ネモの袖から少しだけ見えるある違和感に。それは手と腕がくっついていない、正確に言えば繋ぎ目があるということだ。皮膚と皮膚が縫合されているのでは無く、部品と部品を合わせているという感じだ。

「…大丈夫かい？」

「その手…」

「えっ？ああ」

すぐに袖を戻し、立ち上がった。

「…義手、なんですか？」

「いや、僕は人形なんだ」

そう呟いた。アリエラは驚きのあまり、放心した。

「えっと…その…」

アリエラは何を話せばいいのが分からず、戸惑ってしまった。

「アリエラ」

「はっ、はい！」

「僕の手を見てて」

ネモはポケットから出した一枚のコインを出し、両手で包みこんだ。

「よく見ててね」

アリエラはじーつと、見つめる。そしてネモは手を開けると中から

…

「きやー！」

「おっとー！」

小さくす玉が出てきた。驚いたアリエラは尻餅を付きそうになるが片手でネモが腰を支えた。

「驚いた？」

「…はい、とても」

.....

二人は店の椅子に座り、ネモがマリオネットを見せながらお茶をしていた。

「実はね、記憶がないんだ」

「記憶がですか？」

「そうだね、起きた時にはこの店のベッドで寝ていたんだ。そこで魔女と名乗る人に『ハート』を貰ったんだ。ガラスのハートに似ているハートなんだけどね、人に優しさを与えると中のハートの器にハートの欠片か貯まるんだ」

「…きやあ！／＼／＼」

ネモは服を脱いだ。それに驚き、アニエラは手で顔を隠した。ネモの胸には扉があった。とても普通な引扉。扉を開けるとそこにはハートの器に金色に輝く砂が入っていた。砂時計を思い浮かばせるような感じで。アニエラは指の隙間からそれを見つめた。

「とても…綺麗に輝いてます…」

「ふふっ、ありがとう」

ネモは胸の扉を閉じ、服を来た。

「実は、人形の話はみんなには話したんだけど魔女のことを話したのはアニエラだけなんだ」

「えっ！そうなんですか？でもなんで…」

「なんだか君に話したくなってるね。さあ、もう遅いから今日は帰るといいよ」

外はもう暗く、夕日が落ちていた。辺りは街灯に照らされていて、外で大人達がお酒を飲みながらダイナーをして騒いでいる。

「あの…また来てもいいですか？」

「of course! (もちろん!)」

ネモはアニエラを見送った。アニエラの走る姿はとても元気が見られ、最初に会った時とは違い、犬が久しぶりの散歩に喜ぶような姿であった。夕日が落ちてもまた朝日が昇る様な安心感を感じるよう

に。

第二話「世間」

血の流れは生命の流れ。魂は身体を探し、身体は魂を取り込む。臓器は身体を維持させ、血を流す。目は世界を見据え、耳は世界を聞く。鼻は世界を嗅ぎ、口は世界に語る。手は世界を触れ、足は世界を歩む。心は愛を求め、生き物は世界を彷徨う。心に愛を注ぎ続けなければ器の底から垂れ流れる。愛が無くなると器は壊れ、治さなくてはならない。重すぎる愛も器が支えきれず砕ける。壊れた器は生き物の思考を削ぎ落とし、平常心を失わせる。そうして狂った生き物は絶望に蝕まれるか狂気に満ちる。愛は必要な物であり、扱いにくい物である。

昼下がり、朝の労働を終え、空腹を満たすために人々が町を横行する。あるものは食材を求め、あるものは料理をし、あるものは食事をする。そんな午餐頃、ネモの店『フリドールシヨップ』でネモはフリドを作っていた。小さな手のひらサイズの人形に、そつと丁寧に慎重にハートを埋め込んだ。しばらくすると人形がピクリツと動き、立ち歩いた。フリドの完成だ。

「うわー！凄いです！動きました！」

フリドの完成を興味津々な様子で待っていたアリエラは満面の笑みで喜びに浸っている。アリエラがフリドールシヨップに来てから1週間がたっていた。その1週間、毎日フリドールシヨップに顔を出していた。

「そういえばお家の方は大丈夫なのかな？色々と整理とか必要じゃないの？」

「…私が居ても何も出来ませんから出来るだけ邪魔にならないように家にいないようにしています。デイビットさんにも許可を頂いていますから」

少し俯き、寂しそうな顔をしていた。

「デイビットさんって秘書の人だっけ？」

「はい。私が生まれる前から遣えている人で昔からよくお世話になっています。だけど最近は両親のこともあり、あまりかまってもらえない

くて…」

「…そっか。…そうだ、もうお昼だしお昼ご飯でも食べに行こうか」
暗い雰囲気を変えようと話題を逸らし、昼食をとることにした。丁度お店にハートショップの店長が昼食のお誘いに来てた。ネモは食事を取ることが出来る極めて珍しい人形である。何処で食べるか話しをするとアニエラの提案でレストランで食事をする事になった。お昼時であって、レストランはお客で賑わってた。

「私、こういう所へ来るのは初めてで！」

キラキラした目で周りを見渡す。アニエラにとってはとても新鮮な雰囲気であった。メニューも見ただことないものばかりである。ネモは評判の高いハヤシライス、店長は特大ステーキ、アニエラは目玉焼きが乗り、チーズの入ったハンバーグ、チーズ in めだバーグを頼んだ。しばらく談笑していると料理が運び出された。

「わあ!!美味しそう!!」

アニエラはとても美味しそうに頬張って食べた。

「…?!?チーズが蕩けて美味しいです〜!」

「だーっはっはっは!そんなに美味いか!」

アニエラは初めて食べる料理の美味しさのあまり、顔が緩んでいた。

「そういやネモ、お前は『エンジ』の手掛かりは見つかったか?」

「いえ、まだ重要な手掛かりは見つかっていません」

「そうか、こつちも探しているんだがなんとも言えねえな」

「そうですか」

二人がなにやら話しているのが気になってしまった。

「あの、なんのお話をしているんですか?」

「ん?ああ、こいつの店の店主が失踪したってやつだ。その日にこいつが店にいたもんだからな。俺がその日エンジに用があつて、エンジってのは店主のことだ。エンジかと思って話しかけたらよ、誰だつて返してきたんだ。最初は冗談かと思って話してたんだがそいつの腕を見ると繋ぎ目があつて人目で人形だつてわかったんだ。あつ、人形だつてこと話しちまつてまずかったか?」

「あつ、ネモが人形って話しは聞きました」

「そうか。まあ、その人形がとてもエンジンに似ていてな、人形だつてことでそりや驚いたさ。覚えてるのは名前と店の中身とかエンジンについてのことがなんもわからないってことだったんだ」

「そんなことがあつたんですか」

「まあ、人生何があるかわからねえ。あいつもひよろつと帰ってくると思うだろうし、アニエラも頑張るんだぞ」

「はい！私もいつまでも挫けずにいきたいと思います！」

アニエラは強い意志を持った頑張りポーズをとった。しばらく食事をしてしていると店長が「ちよつと企業秘密の話をするから耳栓をするぞ」と言つてポケットから耳栓を取り出してアニエラの耳に付けた。初めての耳栓に少し驚きながらも面白さを感じていた。

「店長、それで話したのは…」

「聴こえてるだろ、周りの声が」

三人が座る席の周りからはひそひそとした声が聞こえる。レストランという場に合わない声が。「あの子つてこの前死んだ人の子供？」、「こんな所で何してるんだ」、「かわいそうに」など、アニエラに対して向けられた声が聞こえてきた。それを見兼ねて店長がアニエラに耳栓をしたのだ。アニエラに聞こえないように。食事が終わると会計を済ませた。アニエラは自分の食事代を払おうとしたが店長の奢りとなった。

「人の噂も七十五日、噂話が治まるまではアニエラには出来るだけ聞かれないようにしないと、うちのほうにも出来るだけ話しをさせないようにする」

「ええ、私の方も出来るだけ話しが流れないようにします」

噂話が消えるまでは時間がかかる。出来るだけアニエラが傷つかないようにとの思つての判断だった。

.....

店に戻るとアニエラは耳栓を外していいかと聞いてきたので外し

てあげた。

「二人はなんの話をしていたんですか？私だけ聞かせてくれないなんてずるいですー！」

「おいおい、企業秘密が外部に漏れちゃったら俺達の店は簡単に潰れちまうだろ」

「そんなことしませんよ！」

店長は店まで二人を送ったあと、自分の店へと帰って行った。しばらくネモはアリエラにフリドを作っている様子を見せていた。日はすぐに沈んできた。

「では、私もそろそろ帰ります」

「ああ、また今度ね」

アリエラを見送ったネモ。アリエラの心が世間の声に負けないよう、どうするか悩むネモであった。

第三話 「来店者」

？初めは人を模して創られた。何の為に創られたのだろう。思い出だろうか、信仰だろうか、はたまた暇を持て余してか。今となつては関係はない。その時にそう創られたのであつて、今は違う。時代が経つにつれ変わっていく。人も物も、使われ方は変わっていく。

？今日もネモは人形を作る。フリドとなる人形を。それを買いに人が来る。値段は様々、大きさや品質によつて端からピンまで。ネモが売り物として作るほとんどはオーダーメイド、展示品は暇つぶしにする。毎日毎日、人が来る。朝に店を開け、夕暮れには店を閉め、フリドを作り、一日が終わる。

？そんな繰り返し毎日が少し変わった。アニエラという少女がやつて来た。アニエラは最初は借りてきた猫の様に大人しい少女出会つた。次第に心を打ち明けて、本来の子供の様に無邪気な姿を出した。

「ねえ、ネモさん。ネモさんはなんでフリドを作っているんですか？」
？子供が持つ無邪気な心の質問。

「…そうですね、主人が帰つて来ないので、帰つて来るまでは私がこの店の番をしなければなりません」

「ただどここの店の主人が帰つて来るまでは店を閉めてても良かったんじゃないですか？」

？フリドは人間と違い食事を取らなくても生きていける。ただ椅子に座つて主人を待つていても良いのではという意味である。

「確かに、ずっと何もせず待つてても良いのですが突然主人が消えて今まで頼まれていた仕事はどうなりますか？」

？ネモが言つた言葉をよく考えるアニエラ。

「あつ…お客さんが困っちゃいます！」

「そう。待つているお客様がいるのでフリドを作らなければなりません。お店の評判を下げてしまつては主人に頭が上がりませんよ。それ…」

？ネモは店の奥からお茶菓子を持ってきてアニエラに振舞った。そして笑顔で

「こんな小さなお客様を困らせては薄情者になってしまいます。これをどうぞ」

「わあー！今日も美味しそうなお菓子です！」

「今日は変わったお菓子を作ってみました。そのお菓子は…」

「おうネモ！ちよつと仕事を頼みに…って美味しそうなお菓子じゃねーか！」

「て、店長さん！これは私のお菓子です！」

「なんだよアニエラちゃん、ちよつとぐらい分けて貰ってもいいだろー」

？そんな日常にある客が来た。ドアベルの音が鳴り、一人の客がやって来たのだ。

「いらっしやいませ」

？女性であった。白いワンピースを着ていて、靴はストライプの入ったヒール、頭には大きくて白いピクチャーハットをしていた。その女性にはネモを見つめていた。五秒程の時間であったがまるで一分ほど見つめ合っていたかの長さであった。

「トゥール…、トゥール！」

？ネモを見るやいなやネモに抱き着いた。ぎゅつと力強く。その姿にアニエラは顔を赤らめ手をほっぺたに付けた。店長はとても驚いた様子であった。